

氏 名 : 大谷 良子
学位の種類 : 博士 (看護学)
学位記番号 : 甲第 8 号
学位授与年月日 : 平成 25 年 3 月 21 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項
論文題目 : 不妊治療中のカップルにおける “心理的なずれ”
の解消に向けた介入研究
An interventional study focusing on
resolving mental disconnections between
couples undergoing fertility treatment
論文審査委員 : 主査 教授 安藤 広子
副査 教授 伊藤 収
副査 教授 白畑 範子

論文内容の要旨

【目的】 不妊はカップルで取り組むべき問題であるにもかかわらず、不妊治療への取り組みや受け止め方において、男女のずれが生じている現状がある。本研究では不妊治療中のカップルの関係性の向上、そしてパートナーを支えとする不妊治療中の女性の心理的安定の為に、不妊治療中のカップルの “心理的なずれ” の解消に向けた面接プログラムの開発と実施・評価を行うことを目的とした。

【方法】 本研究は看護介入のための面接プログラムの作成と実施・評価の 2 段階からなる。第 1 段階では Schwartz -Barcott& Kim のハイブリッドモデルを参考に、不妊治療を受けているカップルの “心理的なずれ” の概念分析を行い、抽出された 4 つの構成要素、【対処・行動に関する信念の違い】【カップル間の期待の隔たり】【男女間の身体的・心理的差異に対する認知不足】【カップル間

の評価認識の不一致】を基に不妊治療中のカップルの“心理的なずれ”の解消に向けた面接プログラム（アセスメントシート・実践ガイド）を作成した。第2段階では、不妊治療中のカップル6組を対象に研究者自身が面接者として面接プログラムによる介入と評価を行った。面接プログラムによる介入ではアセスメントシートを用いて“心理的なずれ”の状況をアセスメントし、“心理的なずれ”の解消を図るため、目標・具体策を記載した実践ガイドを用いた。介入の評価は、カップルの面接時の語りから質的帰納的分析と「不妊治療を受けているカップルの親密さ尺度」を用いた。カップル間の“心理的なずれ”の解消の判断は、カップルが“心理的なずれ”を認識し、カップル間で向き合い協調していけるような姿勢が見られた状態とした。

【結果】6組のカップルの年齢は、夫は37歳～51歳、妻は34歳～42歳であった。不妊治療期間は1ヶ月から2年8ヶ月で、治療内容は、検査中及び体外受精の段階であった。

面接プログラムによる介入からは、以下のことが明らかとなった。1)6組のカップルの面接プログラムによる介入は1～2時間の面接を2～3回行うことでカップル間の“心理的なずれ”の解消を図る可能性が示唆された。2)6組のカップルの“心理的なずれ”は、4つの構成要素のうち、複数の“心理的なずれ”がある場合、その関係性を見極め、要因となっている“ずれ”に対する具体策を実施していくことが、他の“心理的なずれ”の解消を図る上でも有効であった。3)介入に際しては、カップル間での“心理的なずれ”の認識の違いを考慮した面接者の働きかけが必要であった。妻のみが【カップル間の期待の隔たり】を自覚している状態では、面接者は遠慮している『妻の自己表出を促す問いかけ』をし、表出した『妻の思いを夫が認識できるような橋渡し』を行うことで、その思いを夫に認識するよう働きかけた。カップルが周囲（家族）の言動や過剰な情報に左右され【カップル間の期待の隔たり】がみられている状態では、その要因となっている【男女間の身体的・心理的差異の認知不足】に対して、カップルが『必要としている知識や情報を把握するための傾聴』をし、『正しい専門知識や利用できる社会資源の情報提供』とカップル間で『対話を促す橋渡し』を行い、治療への意思決定を2人で行うという自覚を促した。

また、カップル両方が【カップル間の期待の隔たり】を自覚しているが、夫側からの意思表示が明確でないために対処ができずにいた状態では、面接者が『妻の思いを受け止める共感と評価』と『夫の自己表出のための傾聴』を行い、夫の意志表示ができる場を作った。面接開始時にカップルが“心理的なずれ”の存在を語らない状態では、面接者から『カップル両方に自己表出を促す平等な問いかけ』を行うことで“心理的なずれ”をカップルで認識できるよう働きかけた。4)「不妊治療を受けているカップルの親密さ尺度」では、6組12名の最終面接時の平均得点は、初回面接時の平均得点よりも上昇していたが、t検定では有意差はみられなかった。

【考察】面接プログラムによる介入の評価から、本面接プログラムは、治療期間が3年以内の治療開始及び体外受精の治療段階にあるカップルの“心理的なずれ”の解消において効果があると思われた。面接プログラムの実施においては、複数の“心理的なずれ”の関係性を見極めるためのアセスメント及び、その関係性に応じて実施する具体策の選択が重要と考える。また不妊治療において、妻は産む性であり当事者として中心的立場になりやすく、夫は協力者という第三者的な立場になりやすいという状況をふまえた上で、どちらも当事者であるという自覚を持てるような面接者の介入が重要であると思われた。さらに効果的な介入を行うために、アセスメントシート・実践ガイドの一部修正を行った。アセスメントシートは、“心理的なずれ”の関係性を明確に判断できるようにした。実践ガイドは、“心理的なずれ”の解消の具体策のポイントが明確にわかるように記載した。

論文審査結果の要旨

本研究は、不妊カウンセラーの資格を有する助産師が、地域での不妊相談活動を展開している中で、不妊治療が長期化するにつれてカップルの関係性が悪くなる傾向があることから、不妊治療中のカップルの“心理的なずれ”を明らかにし、その対応として看護介入のための面接プログラムを開発し、それをもとに実施・評価を行った介入研究である。また、研究の構造が2段階となっていて、1段階ごとに研究計画発表会および倫理審査申請書による審査会で承認を得て実施した研究である。

審査の過程において、研究方法のデータ収集と分析、その整理が綿密に行われていることが評価された。特に、第1段階の Schwartz-Barcott & Kim のハイブリットモデルを用いた不妊治療中のカップル間の“心理的なずれ”の概念分析のためのデータと、第2段階の開発した面接プログラム（アセスメントシート・実践ガイド）による看護介入のデータの記録が、資料としての価値が高いとされた。また、看護介入の結果から、面接者としての望ましい姿勢がエビデンスのある看護への提言として次のように述べられている。妻は産む性であり不妊治療の当事者として中心的立場になりやすく、夫は不妊治療の協力者という第三者的立場になりやすいという状況をふまえ、どちらも当事者であるという自覚をもてるような面接者の介入が重要である。そして、単に不妊治療による妊娠がゴールではなく、子どもの有無による生活に対する考えとカップルの人生観を創りあげていく支援者としての介入が求められる。

本研究は、審査会において以下の事項について指摘を受けて再考を行った。

- 1) 研究の第2段階に行った面接プログラムの実施・評価および修正が強調された内容となっていることから、次の2点が指摘されて論文内容の吟味を行った。

- (1) 第1段階の研究と第2段階の研究の関連性が理解できない。

これに対して、第1段階の研究目的とその成果を第2段階の看護介入方法および評価に関連させ、研究の全体像がみえるような文章表現とした。また、“心理的なずれ”の概念分析から抽出された4つの構成要素うち、複数の“心理的なずれ”がある場合には、その関係性のアセスメントと

効果的な介入を図るための具体策の視点からも説明を加えた。

- (2) 不妊治療中のカップルに対する“心理的なずれ”を予防・軽減するための「面接プログラムの開発」なのか，論文題名にある「看護介入研究」なのかが曖昧となっている。

これに対して，「看護介入研究」であることから，看護介入のデータ分析結果およびそれに対する考察内容を追加補充をした。

- 2) 看護介入の評価指標「不妊治療を受けているカップルの親密さ尺度」を用いているが，この分析結果として「介入前後の有意差はみられなかった」だけであり，他に分析の余地があるのではないか。

これに対して，短期間の介入ではあったが，個別的な変化は見られていることから，さらなる介入期間の追跡調査やカップルのおかれた状況を詳細に分析していくことが課題とされた。

カップルの1割が不妊であるという今日において，本研究で開発された「面接プログラム」(アセスメントシート・実践ガイド)の活用は，カップル個々の考えを尊重しつつ，不妊治療中のカップルの関係性を維持・向上させるための看護実践に大いに貢献できると考える。

以上のことから，本論文は博士(看護学)に値するものとして判定された。